



## 大村先生の研究と芸術への熱き想い

タケウチ サトシ  
附属図書館長 竹内 智

2015年のノーベル賞医学・生理学賞は、本学を卒業された大村智先生（北里大学特別栄誉教授）に授賞された。授賞の理由は「寄生虫病に対する新しい治療法の発見」であり、大村先生が長年にわたって研究してきた微生物の有機化合物生産能を人類の福祉と健康に役立てることへの貢献が認められたもの。家畜の寄生虫駆除薬「イベルメクチン」と、アフリカをはじめとする熱帯地域で発生する感染症のオンコセルカ症（河川盲目症）に苦しむ数億人の人々を救ったといわれる特効薬「メクチザン」は、土壌微生物から抽出された画期的な創薬として世界保健機構（WHO）でも認知されている。今回の受賞に際して、大村先生は「微生物にも感謝しなくては」との思いを抱いているとのこと。ノーベル賞受賞までの大村先生の歩みをたどってみる。

大村先生は1935年に豊かな自然に囲まれた北巨摩郡神山村（現韮崎市）の農家の長男として生まれた。韮崎高校から本学学芸学部自然科学科（現教育人間科学部）に入学し、卒業研究では油脂成分の微量分析を行っている（卒業論文が教育人間科学部に保管されていた）。卒業後、都立墨田工業高校定時制に教諭として着任し、働きながらも一生懸命に勉学に励む生徒達の姿をみて学び直すことを決意。昼は東京理科大学大学院で研究を行い、夜は高校で教鞭を執るといいう毎日に明け暮れ、修士課程を修了。その後、本学の発酵生産工学科（現生命工学科）の助手としてワインに関する研究に携わり、研究者への道を歩み出した。2年後北里研究所に転職、早朝から夜遅くまで研究を積み重ねて多くの研究成果を論文として発表、国内外から注目される存在になる。ほどなくアメリカのウェスレーン大学に留学、多くの研究者を通じて提携に

至ったメルク社との共同研究は、特許ロイヤリティを原資として研究を発展させる産学協同の手本として高く評価された。ここでの研究がノーベル賞受賞へと繋がっている。帰国後、北里大学の理事や所長等を歴任し、その間、日本学士院賞や紫綬褒章、藤原賞をはじめとして国内外において数多くの賞を授与されている。

大村先生の才能は研究だけではない。絵画や水墨画、書、陶芸など芸術にも造詣が深い。女子美術大学の理事長を務めたことから、女性芸術家への思い入れはとりわけ大きい。韮崎大村美術館には多くの女流画家の作品が大村コレクションとして収納されている。また、ヒーリング・アート（癒しの芸術）の先駆けとして美術館病院（北里研究所メディカルセンター病院）を設立するなど事業家としても人並みではない。高い創造性を求められることが科学者と芸術家に共通する力量とのこと。

本学附属図書館において、大村先生のノーベル賞受賞を記念した特別展示が実施されている。自筆の卒業論文に加え、当時の先端技術を垣間見ることのできる計測機器や販売されているイベルメクチン薬などが展示されている。地方国立大学から世界を目指した大村先生の研究への熱き想いととも、芸術に関する先生の著書も閲覧でき、一期一会を大切にされるお人柄を知る上でもまたとない機会となっている。ノーベル賞受賞までの歩みから大いなる刺激を受け、将来に向けた勉学と研究へ思いを新たにしたい学生達も多いのではと思われる。特別展示は2016年3月31日まで実施予定。多くのみなさんのご来館を期待したい。

